

2026年4月1日 発行:ワイズメンズクラブ国際協会東日本区 東京都新宿区四谷本塩町2-11
URL: <https://ys-east.or.jp>

10

4月強調月間

Week4Waste/RBM(ロールバックマラリア)

Week4Waste

Week4Waste (W4W) 実施のお願い
～ハチドリの一滴を集めて～



東日本区 CS・Y サ事業主任の
深澤勇弘 (熱海クラブ) です。

2021年より世界中のワイズメンズクラブが参加し、毎年4月に実施されている「Week4Waste (W4W: ゴミ・廃棄物の週)」の季節がやってまいりました。

2050年には、海の中のプラスチックごみの量が魚の数を超えるという説があります。ローマクラブが『成長の限界』で地球資源の有限性を訴えてから50年。毎年末にCOP(国連気候変動枠組み条約締約国会議)が開かれていますが、決定された事項は経済成長の名のもとで実施が困難になっており、私たちは地球環境の破壊を続けてしまっているのが現状です。

ごみ拾い自体が直接的に温暖化を阻止する効果はないかもしれません。

しかし、私たちワイズが環境破壊の課題に真摯に向き合う姿勢を示すことこそが大切です。「ハチドリの一滴」も、世界中のワイズ全員が集まれば、森林火災を消すほどの大きな力になります。

本プロジェクトの目的は、世界中のワイズ全員が一斉に身の回りのごみ拾いを行い、地球を綺麗にすることです。

各クラブの例会等でご相談いただき、クラブ単位でも個人でも、ぜひ町のごみ拾いを実施してください。可能であれば、ユースや地元高校生など若い世代と共にのぼり旗を掲げて実施いただければ幸いです。

皆様の積極的なご参加を心よりお待ちしております。



地域奉仕・Y サ事業主任
深澤勇弘 (熱海)

RBM (ロールバックマラリア)

親愛なる同志の皆様へ、

2026年の世界マラリアデーのテーマを皆さまにご紹介いたします。

マラリア終結を目指す: 今こそできる。今こそ私たちは行動しなければなりません。



世界保健機関(WHO)とRBMパートナーシップはマラリア根絶に向けた進展を加速し続けるために共に皆さまに呼びかけます。世界マラリアデーは毎年4月25日に記念されています。あらゆる人々の声が響きわたりこの運動のアイデンティティ「マラリア撲滅は私から始まる」へとつながっていきます。

存在する二つの真実が明らかとなっています。私たちはマラリアを終わらせることができます—いつかではなく、私たちの生きている時のうちに。歴史上初めて、根絶を可能にするためのツール、科学、そしてアフリカ主導のプログラムが揃いました。今こそ私たちは今すぐ行動しなければなりません。

マラリアは待ってくれません。資金が減少し対応が遅れると、マラリアは急速に再燃し、命が失われます。我々はマラリアによる死を防がなければなりません。

今ならできる。今、行動しなければなりません。希望と切実さは切り離せない。可能性はかつてないほど大きくなっています。また、それを見逃して得られるものは何もありません。今こそ立ち上がり、マラリアに立ち向かうために団結しましょう。

WHOでは各国とすべてのパートナーによる広範な普及を促進し、私たち全員を一つの声で結集させるために、世界マラリアデーの前に歌詞とツールキットを提供いたします

Dr Michael Adekunle Charles
CEO, RBM Partnership to End Malaria

Dr Daniel Ngamije
Director a.i, Malaria and Neglected Tropical Diseases, WHO

東日本区ワイズナイトフォーラム 第3夜

3月22日、日曜日の午後8時から9時までの1時間、第3回ナイトフォーラムが40名の参加者と共に行われた。テーマは「不登校への取り組み、宇都宮、土橋優平氏」。

不登校の居場所を運営するNPO キーデザインの土橋優平さん。
不登校児の親もつらい体験をしている。
不登校による離職、6人に一人は退職、心の健康など親の7割にも影響が出ている。
子どもだけでなく、親との相談会など、幅広くかかわってきた。

不登校の子どもに「もっと頑張れ!」と言うことは、その子の存在否定になるのでは? 社会一般に言えることは、不登校の子どもを学校に戻すことを第一に考え、さらにどう社会に復帰できるかを心配している。土橋さんは、不登校の子どもたちに対して、学校以外で自分に合った教育をどう選ぶかを保護者と共に考え、その味方になろうとしている。親が、子供の味方であることが一番大切だから、親が余裕をもっていられるように周りの人たちがサポートすることが求められている。

そんな中で、最近、国の対応に変化が出ている。2025年11月に厚労省と文科省では、不登校の親の仕事に「介護休業」を2年間認めるという制度ができている。また、市町村による差があるが、学校以外の学びの機会に必要な学費の一部を学校が支援することにも増え始めている。学校側も、先生の長時間労働による先生の休職が増え続けて、これまでの画一教育に変化が起きつつある。不登校児に焦点を当てることも大切だが、もっと親に目を向ける必要がある。親に開かれた目を向けていく必要があるのでは。

TOF 活動:

このプロジェクトは、ワイズメンズクラブ国際協会が集めたTOF 献金から支援されています。「不登校」への取り組みを3年間行うために、総額で15,000スイスフラン(日本円で250万円程度)を援助してもらえます。この不登校プロジェクトは、2024年秋に始まり、2027年12月までの3か年プロジェクトである。これまで宇都宮(とちぎYMCA)、甲府(山梨YMCA)、東京YMCA通信制高等学院のプロジェクトを応援してきた。さらに多くの新しいプロジェクトや、不登校理解のセミナーなどのためにTOF 資金を使う予定で、不登校児特別対応プロジェクト委員会で承認する。

次回5/24(日)の夜8-9時で、脳科学者として知られている山口和彦氏(町田コスモスクラブ会長)を招いて特別講演会が、Zoomで行われます。

(山田公平 宇都宮クラブ、東日本区直前理事)



 YouTube



第1夜



第2夜



第3夜

今までのフォーラムはいつでも YouTube で視聴可能です



なによりも無事に帰国されたことに安堵を憶えますが、参加者たちはこちらが予想していた以上の成長を勝ち取ったことを感じる事ができました。その後も再びインドを目指すもの。次期会長・部役員研修の報告で聴衆を感動の渦にたたき落とすものと送り出した我々も大きな学びを得たプロジェクトとなったことを喜びたいと思います。

送り出した人 佐野加奈ワイズ（富士宮）

「うちのママーはぶっ飛んでる」
 そう娘から言われることを、私は最高の褒め言葉だと思っています。親であれば心配して反対してしまいそうなことも「いいんじゃない？」のひと言で見守ってきました。インド派遣の話をつづけた当初、やはり不安はあったようです。しかしワイズメンズクラブという守られた組織の中で貴重な経験ができることを伝え、あとは本人の決断を待ちました。
 「インドか…ちょっと心配」そう言っていた娘がいつの間にか「え？行くけど？」と決意を固め、ファミリー愛あふれる富士宮クラブ、そして富士山部の皆さまのご支援をいただきながら、インドへと旅立ちました。
 現地での毎日は想像以上に充実していたようです。ホストファミリーとなってくださったクマールさんや現地から届く写真や動画には、日本では見せなかった生き生きとした姿がありました。日本では周囲に気を遣いすぎてしまう娘が、異文化の中で目に映るもの、耳にすることすべてを楽しみ全身で吸収している。その姿は、親として何より嬉しいものでした。
 この経験は、娘の人生における大切な土台となったことと思います。今回参加した学生たちを支えてくださったすべての皆さまに、心より感謝申し上げます。
 これからも娘はもちろん、子どもたちの「挑戦したい」という気持ちを支え続ける一人でありたい。私自身もそう思いを新たにできる機会となりました。皆さんの側にいる子どもや若者たちが、世界に向かって大きく羽ばたいていくことを心から願っています。



送くりだされた人 佐野理子コメット

インドに行くきっかけは何ですか？

ワイズメンズクラブのメンバーである母からの紹介です。決め手となったのは、以前ニュージーランドに3ヶ月の短期留学をしていた際に現地でインドの方とお話をする機会があり、インドの文化や食べ物などについて教えていただいたことです。その経験からいつか実際にインドに行き、自分の目でインドを見たいと考えていた時に今回のプログラムを知ったため、参加を決めました。



インドに行く前のインドの印象は？

ニュージーランドでの体験や、以前インドに行ったことのある方からお話を聞く機会があり、「インドの人はとても優しく、温かい」と教えていただいたことから人々がとても親切、という印象がありました。その一方で、治安や安全面については日本と比べると少し不安も感じていました。



着いた時、もしくは2日目ぐらいの印象は？

実際にインドに到着するとすぐに日本とは全く異なる独特の雰囲気を感じました。街の建物や看板、周囲の人々の動きや声のトーンから、活気とエネルギーが溢れているように感じました。また、出迎えてくれたハイデラバードワイズメンズクラブの方々もとても温かく歓迎してください、事前に聞いていた、インドの人々の温かさをすぐに実感しました。



一番、思い出に残ったことは何ですか？

MLRITM という現地の工科大学を訪問し、寮に一泊二日滞在しながら学生たちと交流をした経験です。到着してすぐに先生方や学生が温かく迎えてくださり、インドのホスピタリティに感動しました。初日は学部やクラブの紹介などをさせていただきました。学部の紹介では学生たちが自分たちで考案し、作成した新しいシステムや機械、また問題を解決するための新しい案についてのプレゼンテーションなどを説明させていただきました。学生一人ひとりが自身のプロジェクトに強い熱意を持って取り組んでいたことが強く印象に残る経験でした。クラブの紹介では音楽やダンスなどのパフォーマンスやゲームなどのレクリエーションも用意してください、それらを通して学生たちとの交流を深めることができました。また二日目には大学の授業を中止し、バトゥッカマ、という色とりどりの花を積み重ねて作った飾りの周りを囲んで踊り、お祝いをするインドの伝統的なイベントを開いてくださいました。学生たちと一緒に踊った時間はとても楽しく印象的で、インドの文化に触れられたと同時に、国や言葉が異なっても、音楽やダンスを通じて自然と心を通わせることができるのだと強く感じました。



一番、嫌な思い出（困ったこと）は何ですか？

最初は入浴の方法に関して少し戸惑いがありました。インドでは、日本のようにシャワーを使うのではなく、大きなバケツのような容器にお湯をため、小さな手桶ですくって体を洗う方法が一般的でした。日本とは異なる、慣れない入浴方法に最初は少し驚きましたが実際に使ってみるとすぐに慣れ、またシャワーのように水を出し続けることがないため、水を大切に使うことができる、環境にも配慮された方法なのではないかと感じました。日本での生活ではあまり意識することのなかった水の使い方について考えるきっかけになり、生活習慣の違いから多くの気づきを得ることができた経験でした。

日本と比べてどうでしたか？

日本と比べて特に印象的だったのは、人と人の距離の近さや温かさです。初めて会う人でもとてもフレンドリーに接してくれ、まるで以前から知り合いだったかのように歓迎してくれる場面が多くありました。大学を訪問した際にも学生たちがさまざまな活動を通して積極的に交流してくれたことで、短い時間でも自然と距離が縮まりました。日本では初対面の人と打ち解けるまでに少し時間がかかることもありますが、インドでは人とのつながりをとても大切にしているように感じました。この経験を通して、人との関わり方やコミュニケーションの大切さについて改めて考える良い機会になりました。

食べ物はどうでしたか？（食べられましたか？）



インドの料理はどれも辛いという印象が強く、普段日本ではあまり辛いものを食べないため、出発前は少し不安もありました。しかし、現地の方々から私たちに配慮してください、スパイスを控えめにした料理を用意してください、辛さを強く感じることもなくおいしく食べることができました。また、少し辛いビリヤニなどの料理でも、ライタと呼ばれるヨーグルトを使ったソースをかけることで辛さが和らぎ、味がマイルドになることなど、現地ならではの食べ方も教えていただきました。このような体験を通して、日本とは異なる食文化に触れることができ、大変興味深く感じました。

中でも特に印象に残っているのは、渡航の前にインドの方に教えていただき、インドで絶対に食べてみたかった料理の一つであるパニプリです。現地で屋台料理として親しまれており、小さな丸い生地の中に具材を入れ、スパイスの効いた水を加えて食べるのですが、その味の中に日本の出汁にどこか通じるような風味を感じ、異なる食文化の中にも共通する要素があるのではないかと感じたことがとても興味深かったです。今回の経験を通してインドの食文化の奥深さを実感することができたため、今後はインド料理についてもさらに理解を深めていきたいと思いました。

宿泊先はどうでしたか？

(ホテル・学生寮・クマールさんの家)

今回のプログラムの中で私は、クマールさんご夫妻のお宅にホームステイをさせていただきました。クマールさんと奥様のラマさんはとても親切で、滞在中はさまざまなお話をしてください、温かく迎えてくださいました。ラマさんは毎日チャイを淹れてください、時には食事も作ってくださいました。特にラマさんが作ってくださったチャイや料理はとてもおいしく、今回の滞在中でも強く印象に残っています。また、チャイの淹れ方も教えていただき、日本に帰国してからも教えていただいた方法で実際にチャイを淹れてみました。さらに、マーケットや公園へ散歩に連れて行っていただいたり、おすすめのお土産について教えていただいたりするなど、現地での生活を身近に感じられる貴重な経験をさせていただきました。その際、ラマさんはバングルやアンクレット、ヘアクリップなどをお土産として買ってくださいました。その温かい心遣いがとても嬉しく、いただいたお土産はホームステイの思い出として大切にしています。また、クマールさんも常に私のことを気にかけてください、「何か困ったことがあったら遠慮せずに言ってください」と何度も声をかけてくださいました。その言葉にとっても安心し、心から感謝しています。今回の

ホームステイを通して、インドの家庭の温かさや人々の優しさを直接感じることができ、とても貴重な経験となりました。

インドの服はどうでしたか？

今回の体験の中で、ハイデラバードのワイズメンズクラブの方々が、お土産としてインドの伝統的な服を買っていただきました。その温かい心遣いにとても感謝しています。私がいただいたのは、クルタと呼ばれる長めのトップスにパンツを合わせ、ドゥパタというストールを身に着ける、インドの伝統的な服装でした。ところどころにスパンコールで装飾が施されており、控えめながらも華やかでとてもきれいなデザインでした。

服を選ぶ際には、お店の店員さんがとても親切に、私が選んだクルタに合うパンツやドゥパタの色を一緒に考えてくださいました。私は日本で着物の着付けを習っているのですが、着物でも帯や小物の色合わせを考えるため、その感覚とどこか似ているように感じました。文化は違っていますが、色の組み合わせを楽しむという点に共通するものを感じ、親しみを覚えました。実際にその服を、大学で行われたバトカマのイベントや結婚式の際に着る機会がありました。普段日本ではなかなか着ることのない服装だったため最初は新鮮に感じましたが、着てみると生地がとても薄いため通気性が良く、インドの暑い気候の中でも快適に過ごすことができ、インドの気候や生活にとてもよく合った服なのだと身をもって感じました。また、現地の人々と同じような服を身に着けることで、インドの文化をより身近に感じることができました。実際に着て体験することで、服装もその国の文化の一部であるということを実感し、とても印象に残る貴重な経験となりました。



日本に帰ってきて、インドの印象はどう変わりましたか？

研修に参加する前から、インドの人々はとても優しく温かいという話を聞いていました。しかしその一方で、日本とは文化や生活環境が大きく異なる国であるという印象も強く、実際に現地で生活することや治安面については、少し不安に感じていた部分もありました。

しかし、実際にインドを訪れて生活してみると、その印象は大きく変わりました。空港での出迎えをはじめ、大学での交流やバトカマのイベント、ホームステイでの生活など、さまざまな場面で多くの方々が温かく迎えてくださり、常に周りの方々の優しさを感じながら過ごすことができました。慣れない環境の中でも多くの方が気にかけて声をかけてくださり、その温かさに何度も助けられました。そうした周囲の支えのおかげで、不安な気持ちも次第に和らぎ、安心して研修に参加することができました。

また、この研修では多くの方々との出会いにも恵まれました。ハイデラバードのワイズメンズクラブやYMCAの方々はじめ、今回の研修を支えてくださった多くの方々に温かく迎えていただき、さまざまな場面で支えていただきました。特に、私が関わる機会の多かったクマールさんご夫妻には、ホームステイの受け入れをはじめ、さまざまな面で大変お世話になりました。クマールさんご夫妻や大学で出会った学生たちなど、研修プログラムを通して出会った

多くの方々とは、日本に帰国した今でも連絡を取り合っています。こうした出会いを通して生まれたつながりが今も続いていることをとても嬉しく感じています。今回の経験を通して、人との出会いやつながりがどれほど大切なものであるかを改めて実感しました。

この10日間の研修を通じて、インドが温かい人々と豊かな文化を持つ魅力的な国であることを身をもって感じることができました。今回出会った方々とのつながりをこれからも大切にしていきたいと思うとともに、今後もインドについてさらに理解を深めていきたいと考えています。今回の研修で得た経験や出会いは、これからの自分にとって大きな財産になると感じました。

そして、今回の研修で経験した出来事や出会いの一つ一つは、どれも私にとって忘れることのできない大切な思い出となりました。

また、機会があればもう一度インドを訪れ、今回の研修でお世話になった方々に再会し、改めて感謝の気持ちを直接伝えたいと考えています。

・それぞれのプログラムについての思い出をいくつか（ヨガ、歓迎会、T-Hub 見学、インド伝統舞踊、MLRITM (Marri Laxman Reddy Institute of Technology and Management)、結婚式、看護学校 (Yashoda College of Nursing)、博物館、フェアウェル・パーティー、自由行動、観光など)

インド舞踊は、今回の研修で特に印象に残った体験の一つです。実は、幼少期に数回インド舞踊を拝見したことがあり、その華やかな衣装や、日本には見られない独特の踊りの表現は、今でも強く印象に残っています。今回の研修では、北インドと南インドの舞踊の違いについても教えていただき、それぞれの舞踊を実際に鑑賞することで、地域ごとの特色や美意識の違いを肌で感じるすることができました。

南インドの舞踊は、色鮮やかで金の装飾が施された衣装や濃いメイクが特徴で、ポーズや手の形、目や表情を駆使して物語や感情を表現するのが印象的でした。これに対して北インドの舞踊は、衣装は洗練され優雅で、回転やしなやかなポーズ、細やかな手の動き、表情を使った表現が非常に美しく、舞全体の流れと動きの優雅さに心を打たれました。

両方の舞踊を鑑賞することで、インドの伝統文化の多様性や奥深さを肌で感じる事ができ、大変貴重な経験となりました。



次期会長・部役員研修会を開催

3月14日(土)～15日(日)に日本YMCA同盟 東山荘で64名の参加をもって次期会長・部役員研修会が開催されました。

各事業主任から次期の活動方針が示され、次には部を越えた論議の場として、充実したクラブライフのために一人ひとりが何が出来るかを出し合いました。そこですべてが結論づけられるわけではありませんが、この論議が次への活動への基礎となることが期待されます。

我々は「何のためにワイズとして活動し続けるのか」という論議の材料とすべく、帰国したばかりの「インド体験ツアー」参加者で富士宮クラブ 佐野加奈ワイズのコメット 理子さんが素晴らしい報告を行い会場は感動に包まれました。ユースに対する支援は、やれば必ずワイズに自信と確信をリターンしてくれることを確認できる機会であったと思います。

楽しい交流会ではワイズらしからざる？ノリノリな宴会となり、その勢いは2次会となった暖炉前での交流まで続きました。やり過ぎたメンバーが続出しました。佐野理子さんもその勢いに動じることなく我々の交流の場に加わっていただきました。

翌日は部ごとに分かれて分科会が開催され、部として部のあり方の見直しや夢などが語られました。

主な論点

1. クラブの魅力と課題

入会・継続の原動力は **人との出会い、居心地の良さ、交流の楽しさ** 特に退職後の社会的つながりの場として機能している。
一方で、**少子高齢化による会員減少、活動の固定化、人手不足** が共通課題として挙げられた。

2. ユース・若者世代との関係づくり

若者を「勧誘する」のではなく、**現場で共に活動し、対等な関係を築くこと**が重要との認識で一致。
* YMCA やユースの現場に足を運ぶ「1日1Y」など、**組織全体での関与拡大**が提案された。

3. 活動の方向性・工夫

子ども食堂、チャリティラン、地域イベントなど、**目に見える体験型奉仕**が新たな出会いにつながる。
小規模クラブでは **合同例会やハイブリッド開催**により人数と活気を確保する工夫が共有された。

4. 組織運営とリーダーシップ

柔軟さだけでなく、**方向性を示すリーダーシップ**が組織活性化に不可欠。
部や役割の再編、基金の事業活用など、**現状に合わせた運営形態への転換**が議論された。

5. 結論的メッセージ

ワイズの活動は「**楽しむこと**」こそが**原点**
変化を恐れず、クラブや世代の壁を越えて協力することで、活動はより魅力的に

田附YMCA担当主事の報告は現在だけでなく誕生から今まで地域で果たしてきた役割と成果までがテンポ良く理解しやすい語り口で、ワイズが支えるものの価値。YMCAが地において必然性のある組織であることが確認でき、参加者の自信とつながったと思います。

理事スタッフも皆さまから多くのご批判と共に励ましをいただきました。すべての参加者の皆さまとともに私たちも多くを学びました。責任を感じつつみなさんと共に前に向けて進んでまいりたいと思います。



15周年を迎えた東日本大震災の被災地より

3月11日(水) 震災15年を迎えた被災地を振り返り今を伝えるテレビプログラムが番組表を埋める中、平日の昼にもかかわらず100人近い方が対面で、あるいはリモートで石巻栄光教会での追悼祈念礼拝に参加されました。特に東西日本区の垣根を超えて多くの方が参加されたことは驚きと共に感謝の気持ちで満たされました。

また、ふくしまYMCA設立準備委員会(大島博幸委員長)が4月15日(土)には福島市内日本キリスト教団福島教会において和田祐樹さん(ホールアース自然学校福島校代表)を迎えて、「3・11を覚えて3.15「祈禱会」と「交流会」を開催

しました。自然環境保護の観点からのふくしまの復興支援活動について学びを深めました。この取り組みは3月29日-31日にふくしまで開催されるYMCAユースのスタディーツアーにも繋がる取り組みでした。

当日、説教・司式を努めた地元ホスト委員会 川上直哉牧師から6月6日の東日本区大会に向けて感謝と共にメッセージが届いているのでご紹介します。ぜひ被災地の今を現地で感じてください。少しお得な通常登録は4月15日まで。それを過ぎると直前登録となります。ぜひ早めにご登録ください。



4月15日
登録期日
(1次)
登録ページ



ワイズメンズクラブ国際協会 東西日本区のみなさま

教会の暦はレントの最終版・受難週となりました。
イスラエル共和国と中東各国で燃え上がる戦火に、
石巻・仙台の空襲を思い出します。
なお、心を込めて、平和の挨拶をいたします。

今年6月に行われる「東日本区大会」にむけて、大きなお心を賜っております。とりわけ今年は「15年」を経た石巻での開催です。長い年月、たゆまずに支援し覚え祈ってくださった皆様に、16回目の「3.11」を経た後の要案をご覧ください。ホスト委員会一同、東日本区実行委員会と思いを合わせて準備を進めています。心から、皆様のお越しをお待ちしています。

津波被災地では「被災の当事者が、復興の当事者になっていない」という痛ましい現実があります。15年の間、ずっとそれに向き合ってきた経験を、いよいよこれから、原子力災害の被災地へと、つなげたく思っています。今、盛岡・仙台・茨城・栃木のYMCAとワイズメンズクラブが協力して、「ふくしまYMCA設立準備委員会」が立ち上がっています。2011年3月15日に「臨界・爆発」が(とりあえず)収まった(らしい)、ということを感じて、今年の「3.15 = 3月15日」に、祈禱会と交流会を開催しました。そして3月28~31日に「福島スタディーツアー」が行われ、ユースリーダー11名が参加してくださいました。皆様のご助力を賜りまして、6月の第29回東日本区大会を、さらに「次」へとつなげたいと願っています。

人員不足から、「オンライン」での登録にご協力を頂いております。おかげさまで、「目標300名」に対して「180名」を超える登録を頂いております。もうひといき、です。ここに、Faxでも登録申し込みができます用紙をお送りいたします。また、エクセルデータを下のQRコードか<短縮URL>から、ダウンロードいただけるようにも致しました(大会ホームページからもダウンロードいただけます)。私・川上ホスト委員長が、その受付をいたします。どうぞ、クラブのみなさまにお声がけくださいます。もう一段のご協力に、お力を賜りますよう、お願いいたします。

末筆となり恐縮です。新年度のみなさまのさらなるご躍進を願い、天来の祝福豊かならんことをお祈りいたします。

2026年3月31日

ワイズメンズクラブ国際協会第29回東日本区大会ホスト委員長

川上直哉

メール: naoya2naoya@gmail.com

電話: 090-1373-3652 FAX: 0225-94-9337

日本YMCA同盟報告（2026年4月）

東日本区担当主事 田附和久（東京武蔵野多摩）

アメリカとイスラエルによるイランへの軍事攻撃に世界が衝撃を受ける中、日本YMCA同盟では、中東におけるあらゆる軍事行動の即時停止を求め、国際社会およびすべての関係国に対して、国際法の遵守に基づく非暴力の対話を通じた外交的解決、平和構築に努力することを要請する声明文を、会長と総主事の連名により3月9日付で発出しました。以下に声明文の締めくくりの箇所を引用します。「正義、公正、平和は、暴力や武力によっては実現しません。私たちは、世界のYMCAの仲間たち、地域で共に生きる人びととの連帯を通して、一人ひとりの尊いのちと人権が守られるよう、平和の実現に向けて祈り、活動を続けていきます。」声明全文は、日本YMCA同盟のホームページでご覧いただけます。

日本YMCA同盟では、田口努第16代総主事の任期満了に伴い、2026年4月1日付で太田直宏（おたただひろ）第17代総主事が就任いたしました。3月20日には、日本キリスト教団番町教会（千代田区）に、全国YMCA、ワイズメンズクラブ、関係団体の代表の皆様にお集まりいただき、総主事就任式を執り行いました。太田新総主事は、1960年12月28日生まれの65歳。関西学院大学法学部法律学科で学び、大学在学中はグリークラブに所属しました。卒業後、民間企業に勤めた後、1985年12月にアジア協会主催のフィリピン・ワークキャンプに参加し強い衝撃を受け、その後、1986年4月に神戸YMCAに入職。神戸YMCAでは、

西宮、宝塚等のYMCAで、予備校、野外、地域活動等を担当し、1991年に岡山YMCAに出向しました。1995年阪神淡路大震災の影響を受け岡山YMCAに移籍し、2005年には岡山YMCA第4代総主事に就任しました。2013年には岡山YMCAが公益財団法人化に伴い、YMCAせとうちと名称を変更しましたが、その際、代表理事に就任。その後、今日に至るまでYMCAせとうちの総主事を務め、その間、全国YMCA総主事会議副会長、学童保育・英語教育・国際の各事業担当総主事を歴任しました。川崎医療福祉大学非常勤講師、岡山野宿者支援NPOきずな理事、岡山キリスト災害支援室役員も務め、また、岡山ワイズメンズクラブの会員でもあります。所属教会は日本基督教団岡山信愛教会です。



JEF 献金に感謝を

2月実績はありませんでした

新規入会者のご紹介

おめでとうございます

入会日	部	クラブ	氏名	紹介者
2月10日	北東部	宇都宮	笹谷美桜	服部慧
2月12日	かながわ部	横浜つるみ	後藤美紀	久保勝昭
2月12日	かながわ部	横浜つるみ	小崎侑里子	久保勝昭
2月18日	かながわ部	大和クリエイティブ	大原義隆	小松仲史
3月1日	関東東部	千葉	桑田秋光	再入会
3月20日	富士山部	伊東	佐藤大介	金子正樹
4月16日	あずさ部	東京たんぼぼ	羽賀伸子	藤江喜美子・小原史奈子
5月23日	関東東部	川越	五十嵐政二	再入会(西日本区より)

今後の予定

4月2日 ユース事業委員会
4月5日 年次代議員会議案提出
4月6日 ふくしまYMCA設立準備会
4月10日 LT委員会
4月11日 YYウォーク縄文の旅（Y友広場）
4月11日 第3回東日本区役員会
4月12日 東西日本区理事連絡会議
4月12日 YYクラウド講習会
4月12日 表彰会議
4月15日 東日本区大会登録期日（1次）
4月18日 あずさの集い

4月18日 北海道部次期役員研修
4月20日 年次代議員会招集案内発送
4月20日 東日本区大会ホスト委員会
4月21日 東日本区大会区実行委員会
4月25日 障がい者フライングディスク大会（富士五湖）
4月30日 ドバイ国際大会アーリーバード期日
5月10日 神田川船の会
5月14日 東京西クラブ50周年記念例会
5月15日 東日本区大会登録期日（最終）
5月15日 JEF最終エントリー期日
5月19日 東西日本区情報交換会
5月23日 第4回東日本区役員会